

備後特産品づくり5年目

地元産品を商品に企画加工し、地域のブランド化に役立てる活動を目的とする任意団体「備後特産品研究会」(広島県福山市)が、発足から五年目を迎えた。これまで開発してきた特産品に込めた狙いと今後の展開を、同研究会の中島基晴会長に聞いた。

中島 基晴さん



(なかしま・もとはる) 1967年(昭42年)広島県福山市生まれ、41歳。90年慶応義塾大学商学部卒、伊藤忠商事に入社。慶大職員などを経て郷里に戻り、97年から家業である食品卸の中島商店専務。

売れ続ける商品には「物語」

「これまでの成果は。」

「クワイ、アンス、ブドウなど一次産品を中心に備後地域の食材を使ってアメ玉やチョコレートを作った。誰もが身近で手に取ってもらいたい、おいしいものから始めたが、三年目あたりから手応えが出てきた。生産者と消費者をつなぐ市場の橋渡し役に徹してきて、瀬

戸内には意外とビジネスマッチングできる地域資源が多いことにも改めて気づいた」

「例えば保命酒を使って菓

子などに加工した五品は、福

山にある瀬戸内海の景勝地、

鞆の浦を広く知ってもらった

めの情報伝達の役割を果たし

「閉鎖性」に挑む

「記者の目」福山市に全国的

な名物が乏しいのは、恵まれた土地柄が慢心や情報発信力の低下を生む土壌になっているからではないかと、中島さんはみる。

「商品には、モノの背景と

なる独自の物語性がないと、

いざ発売しても打ち上げ花火

に終わり長続きしない。物語

ていききたい」

「商品には、モノの背景と

なる独自の物語性がないと、

いざ発売しても打ち上げ花火

に終わり長続きしない。物語

ていききたい」

とは固有の歴史や文化だ。鞆の浦の保命酒は黒船来航時の供宴にペリーらに出した記録も残っている。蔵元は現在、鞆の浦に四つある。鞆の浦は江戸時代の建造物が今も残る港町で、古くは瀬戸内海交通の要所として海外にも開かれていた。こうした話をどれだけ掘り起こして、商品に結びつけていくかが大事だ」

「今後、研究会が目指す方向は。」

「まだスタートラインに立ったばかり。商品の知名度が上がり、販路が拡大し、携わるメーカーや商店の利益にもつながって、地元の雇用創出にも貢献でき、地域が活性化していけばうれしい。だがそこに行くまでには、共通の土台づくりが必要だ。我々のような民間だけの活動には限界がある。行政機関なども巻き込みながら、全国でまちづくりに奔走する人たちのモデルとなるような方法論を構築していきたい」

鐘を鳴らす。グローバルな視野とバランス感覚、斬新な感性をもつ世代が、特産品づくりを通じて、閉鎖性が強い地方独特の壁にどう風穴を開けるかにも注目したい。

(福山支局長 三好博司)

